

# 小学校の特別支援教育体制における 養護教諭の職務に関する調査研究

米倉 夢

## I 問題

昨年度より、本格的に特別支援教育が進められている。室岡・恵羅・大庭(2005)の調査報告では、校内委員会のメンバーとして望ましい構成員として、「校長」、「教頭」と並び、70%以上が「養護教諭」と回答している。しかし、この回答を学校規模や特殊学級の設置別でみると、回答者にばらつきがみられる結果が示されている。猪狩ら(2007)の報告をもとに、特別支援教育体制における養護教諭の職務を整理したところ、三宅ら(2008)のあげる特別支援教育コーディネーターの職務との類似や従来の養護教諭の職務との類似がみられた。

特別支援教育に関する研究において、養護教諭に特化した研究は非常に少なく、養護教諭の職務に注目した研究はほとんどみられない。このような状況は、養護教諭が特別支援教育体制においてまだ十分に位置付けされていないためであると考えられる。そこで、今後の特別支援教育において、養護教諭がどのような領域で力を発揮していくべきかを検討する必要がある。

## II 目的

まず、養護教諭を対象として、小学校の特別支援教育体制における自分自身の職務内容に関する「今後の重視度」とこれまでの自分の職務に対する「評価」を調査し、養護教諭自身の「職務認識」を明らかにした。また、特別支援教育コーディネーターを対象として、小学校の特別支援教育体制における養護教諭の職務内容に関する「今後の重視度」と、これまでの養護教諭の職務に対する「評価」について調査し、特別支援教育コーディネーターによる「役割期待」を明らかにした。

本研究では、これらの結果を比較することにより、①これまでの特別支援教育体制における養護教諭の職務に対する評価と、②今後の特別支援教育体制における養護教諭の職務領域を明らかにす

ることを目的とした。

## III 養護教諭を対象とした調査(調査1)

### 1 目的

養護教諭の職務認識を探るため、特別支援教育体制における養護教諭の職務内容に関する今後の重視度とこれまでの養護教諭の職務に対する評価を明らかにした。

### 2 方法

上越市立の全小学校の養護教諭 54 名を対象として質問紙を郵送し、郵送により回収した。以下の領域(1~8)について、重視度とこれまでの評価について質問した。1. 学習上の支援に関する領域、2. 健康・生活面での支援に関する領域、3. 保健室の活用に関する領域、4. 保護者とのかかわりに関する領域、5. 外部機関とのかかわりに関する領域、6. 学級担任とのかかわりに関する領域、7. 組織的な活動へのかかわりに関する領域、8. 特別支援教育コーディネーターとのかかわりに関する領域。

調査1の分析の観点とは、図1に示した。

### 3 結果

38名の養護教諭から回答を得た。回収率は、70%であった。回収した回答のうち、3名は、特別支援教育コーディネーターを兼務する養護教諭であったため、回答を除外し、残りの35名を分析の対象とした。

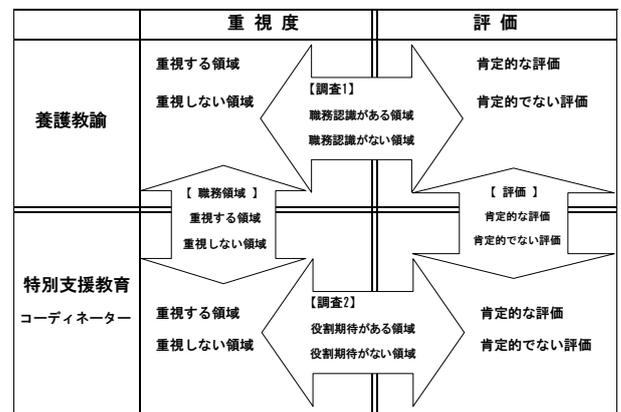


図1 分析の観点

表1 対象者間での各領域の重視度と評価

	全体		1学級～11学級		12学級以上	
	養	コ	養	コ	養	コ
1 健康・生活面での支援に関する領域	○	↑	↑	×	○	↑
2 保健室の活用に関する領域	○	↑	↑	○	↑	↑
3 保護者とのかかわりに関する領域	○	↑	↑	○	↑	↑
4 外部機関とのかかわりに関する領域	○	↑	↑	○	↑	↑
5 学級担任とのかかわりに関する領域	○	↑	↑	○	↑	↑
6 特別支援教育推進員とのかかわりに関する領域	○	↑	↑	○	↑	↑
7 組織的な活動へのかかわりに関する領域	○	↑	↑	○	↑	×
8 学習上の支援に関する領域	×	↑	×	×	×	×

- 注1) 表中の○は、「重視する」領域を示す。
- 注2) 表中の×は、「重視しない」領域を示す。
- 注3) 表中の＝は、「重視する」「重視しない」同等である領域を示す。
- 注4) 表中の↑は、「肯定的な評価」である領域を示す。
- 注5) 表中の↓は、「肯定的でない評価」である領域を示す。
- 注6) 表中のあみかけは、対象者の属性により相違のある領域を示す。
- 注7) 表中の「養」は、「養護教諭」を指す。
- 注8) 表中の「コ」は、「特別支援教育コーディネーター」を指す。

なお、除外した3名については調査1とは別に分析の対象とした。

養護教諭が重視する領域は、8領域中7領域(学習上の支援に関する領域以外)であり、そのすべての領域は、「これまで職務が活かしている」という、肯定的な評価によって職務認識のある領域であった。また、対象者の属する学校規模別(1～11学級と12学級以上)でみると、8領域中6領域(学習上の支援に関する領域、組織的な活動へのかかわりに関する領域以外)については、同様の結果であった。結果が異なっていた、「学習上の支援に関する領域」は、1～11学級の学校では、これまでの評価は、肯定的な評価であり、今後は「重視しない」という結果であった。しかし、12学級以上の学校では、これまでの評価は、肯定的でない評価であり、今後は「重視しない」という結果であった。また、「組織的な活動へのかかわりに関する領域」は、1～11学級の学校では、これまでの評価は肯定的な評価であり、今後も「重視する」という結果であった。しかし、12学級以上の学校では、これまでの評価は肯定的な評価であったが今後は「重視しない」という結果であった。つまり、「学習上の支援に関する領域」と「組織的な活動へのかかわりに関する領域」は、学校の規模によって、養護教諭自身の職務認識が異なるといえる。

#### IV 特別支援教育コーディネーターを対象とした調査(調査2)

##### 1 目的

特別支援教育コーディネーターの役割期待を探るため特別支援教育体制における養護教諭の職務内容に関する今後の重視度とこれまでの養護教諭のかかわりに対する評価を明らかにした。

## 2 方法

上越市立の全小学校の特別支援教育コーディネーター54名を対象として質問紙を郵送し、郵送により回収した。調査内容は調査1と同じである。調査2の分析の観点は、図1に示した。

## 3 結果

37名の特別支援教育コーディネーターから回答を得た。回収率は、69%であった。回収した回答のうち、2通の回答を除外した35名分を分析の対象とした。

特別支援教育コーディネーターが重視する領域は、8領域中7領域(学習上の支援に関する領域以外)であり、そのすべての領域は、これまで養護教諭のかかわりがうまくいっているという肯定的な評価によって、役割期待のある領域であった。この結果は、養護教諭を対象とした調査(調査1)における結果と同様であった。また、対象者の属する学校規模別(1～11学級と12学級以上)でみると、8領域中7領域(組織的な活動へのかかわり以外)は、同様の結果であった。結果が異なっていた「組織的な活動へのかかわりに関する領域」は、1～11学級の学校では、これまでの評価は肯定的な評価であり、今後も「重視する」という結果であった。しかし、12学級以上の学校では、これまでの評価は肯定的な評価であったが、今後は「重視する・重視しない同等」の結果であった。つまり、「組織的な活動へのかかわりに関する領域」については、学校の規模によって、特別支援教育コーディネーターによる役割期待が異なるといえる。

## V 考察

以上の結果から、対象者間で「重視度」と「評価」を比較し、「これまでの養護教諭の職務に対する評価」と「今後の養護教諭の職務領域」を検討した。表1は、対象者間での各領域の重視度と評価を整理したものである。

これまでの特別支援教育体制における養護教諭の職務に対する評価は、8領域すべてについて養護教諭自身は「これまでの職務が活かしている」と評価し、特別支援教育コーディネーターも

「養護教諭のかかわりをうまくいっている」と評価していた。しかし、対象者の属する学校規模別(1～11学級と12学級以上)でみると、「学習上の支援に関する領域」については、学校の規模により、養護教諭自身の評価に違いがみられた。

また、今後の特別支援教育体制における養護教諭の職務領域としては、7領域(学習上の支援に関する領域以外)について、特別支援教育コーディネーターによる役割期待があり、養護教諭自身の職務認識もあるという結果であった。しかし、対象者の属する学校規模別(1～11学級と12学級以上)でみると、「学習上の支援に関する領域」と「組織的な活動へのかかわりに関する領域」については、学校の規模により、養護教諭自身の職務認識と特別支援教育コーディネーターによる役割期待に違いがみられた。

## VI 結論

養護教諭は、各学校1～2名の他教諭とは異なった存在である。また、保健室も学校において他の場所とは異なる場所である。本調査では、先行研究で示されてきた、養護教諭の特異性が、特別支援教育体制での養護教諭の職務の各領域に活かされていた。このことから、養護教諭の従来の職務は、特別支援教育体制においても活かすことができることと示唆される。そのため、今後は、養護教諭を含めた特別支援教育体制を構築することが重要であると考えられる。

また、猪狩ら(2007)の報告から、特別支援教育体制における養護教諭の職務は、三宅ら(2008)のあげる特別支援教育コーディネーターの職務との類似や従来の養護教諭の職務との類似がみられた。本研究では、類似する領域(保護者とのかかわりに関する領域、外部機関とのかかわりに関する領域、学級担任とのかかわりに関する領域、組織的な活動へのかかわりに関する領域)についても、養護教諭自身も特別支援教育コーディネーターも肯定的に評価していた。このことから、類似する領域についても、必要な場合には養護教諭が力を発揮することが可能である。そのため、各学校において養護教諭と特別支援教育コーディネーター

とが個々のケースに応じて、役割を分担し合うことが必要である。今後の養護教諭の職務領域としては、7領域(学習上の支援に関する領域以外)について、特別支援教育コーディネーターによる役割期待があり、養護教諭自身の職務認識もあるという結果であった。このことから、養護教諭自身も特別支援教育コーディネーターも、養護教諭が、特別支援教育にかかわっていくことについて、肯定的に捉えていることが窺えた。

今後は、養護教諭を校内の支援体制のメンバーとして位置づける必要があると考える。ただし、本研究において、「学習上の支援に関する領域」と「組織的な活動へのかかわりに関する領域」については、学校の規模により養護教諭自身の職務認識と特別支援教育コーディネーターによる役割期待に違いがみられた。そのため、各学校1名の養護教諭がどこまで役割を担えるのか、養護教諭の従来の職務と関連させ、各学校の規模に応じて検討する必要がある。また、特別支援学級等の設置状況によっても、養護教諭の今後の職務領域が異なることが考えられる。そのため、今後は、特別支援教育コーディネーターだけでなく、特別支援学級等の担任との連携や役割分担を含めて、各学校の規模や中心となり得る存在の有無等の状況に応じて、養護教諭の職務を検討していく必要がある。

## 文献

- 猪狩恵美子・数見隆生・河田史宝・佐藤理・糸戸洲美・鈴木裕子・高橋裕子・中村富美子・野村和雄・藤田和也・山本浩子(2007)通常の学校で学ぶ病気や障害のある子どもへの支援に関する研究. 日本教育保健学会共同研究・第2次報告.
- 三宅康勝・横川真二・吉利宗久(2008)小・中学校における特別支援教育コーディネーターの職務と校内体制. 岡山大学教育実践総合センター紀要, 8, 117-126.
- 室岡徳・恵羅修吉・大庭重治(2005)通常の学級に在籍する軽度発達障害のある児童に対応した校内支援体制に関する学級担任の意識. 発達障害研究, 27(4), 316-330.